

# 都立高校改革

## 全国で先駆けとなった背景

近年、各地で公立高校の改革が進んでいるが、平成9年に「都立高校改革推進計画」を策定した東京都は、全国的に見てもほかの自治体に先駆けて積極的に取り組み、先進的な改革を行ってきた。このような取り組みの背景には、東京都独特の事情があった。

昭和30年代から昭和40年代にかけての高校進学率の上昇(資料1参照)や昭和30年代後半と昭和60年代前半をピークとする、二次にわたるベビーブームによって高校の生徒数が急増した。それに対応すべく、東京都教育委員会および都立高校、私立高校は連携・協力して、生徒の受け入れに努めた。さらに東京都教育委員会は、生徒の急増に対応した高校の新設等、ハード面の整備を図ってきた。このような取り組みは一定成果を上げたが、新たな課題が持ち上がった。

近年、高校進学率は96.6%をピークとして、少子化の進行により高校進学者が減少傾向に転じた。また、生徒の能力・適性、興味・関心、進路希望等の多様化は一段と進み、さらに一部には学校生活に適應できない生徒が顕著になって中途退学者が増加している。そこで、それらの課題に対応すべく、進学指導重点校や重点支援校、エンカレッジスクールの指定など特色ある高校への再編、そしてチャレンジスクール等の設置(右頁・資料2参照)とソフト面を重視した改革が進められた。もともと東京都には私立の中高一貫校、有名大学の附属中高一貫校などが多いこともあり、かねてより小学校・中学卒業時に私立校へ進学する者が多く、ほかの道府県と比べても私立高校進学者の割合は高かったが、ニーズの多様化によりそのような傾向はいつそう進んだと思われる。これは画一的な教育

になりがちである公立校に比べ、私立校の方が柔軟かつ迅速にニーズの多様化に対応し得たことの証左と言える。

そのほかにも、生徒急増期に新設された学校の施設・設備の老朽化への対処や、生徒数の減少に伴う学級定員の段階的減員と学級数の調整による学校の小規模化の進行に対応した都立高校の規模と配置・適正化と課題は山積している。

## 注目される取り組み

現在、規制改革、地方分権が進む中、学区制廃止、学校経営計画策定、外部評価推進、校長の裁量権拡大、民間人校長の採用、教員公募制実施等、学校運営の根本的な見直しが進み、教員の意識改革も促進されている。その中で、公立高校も個性・特色が求められるようになり、競争原理にさらされる。その結果、淘汰されてくる高校もあるかもしれない。東京都に限らず、公立校には公立校ならではの使命があり、学ぶ機会や進学のを閉ざさぬようにすることはもちろんのこと、学業、人材育成とも私立校に劣らぬ教育を受けられるように考慮せねばならない。そのためにもこれからの時代は、各高校は、地域や保護者等の意見を取り入れ、ニーズの多様化に対応していかなければならない。

平成9年に始まった都立高校改革も、一段落する平成18年度まで残り1年、平成23年度までの計画継続期間まで残り5年となっている。教育は数年で成果が出るものではないため、現段階でその評価をすることは難しいが、日本の最先端に行く高校改革が、現在どのような効果をもたらしているのか、いかなる課題が出てきているのかなど、注目すべき点は多い。

資料1 都内公立中学校卒業生の進路状況の推移(昭和30年度～平成13年度)

卒業年度	卒業者合計	高校等進学者								就業者	専修学校等入学者	無業者等
		全日制			定時制	通信制	盲・ろう・養護学校高等部	高校等進学者合計	高校等進学率			
		都立	私立	国立・他県								
昭和30年度	119,883	33,145	33,964	875	11,905	-	-	79,889	66.7%	33,255	1,387	5,352
昭和35年度	104,261	36,196	36,684	1,357	6,811	-	-	81,048	77.7%	21,032	900	1,284
昭和40年度	141,377	50,375	59,171	4,707	7,545	-	46	121,844	86.2%	14,724	3,231	1,578
昭和45年度	106,985	51,453	46,107	2,234	1,764	-	37	101,595	95.0%	3,983	943	464
昭和50年度	119,135	57,459	48,781	4,790	2,353	-	109	113,492	95.3%	3,110	1,876	657
昭和55年度	142,114	70,317	53,402	6,873	3,704	-	289	134,585	94.7%	4,168	2,546	815
昭和60年度	154,175	74,494	54,388	8,904	5,427	119	584	143,916	93.3%	4,395	4,197	1,667
平成2年度	125,192	62,764	44,117	7,324	3,005	466	571	118,247	94.5%	2,131	3,702	1,112
平成7年度	92,486	50,040	29,903	5,169	2,482	767	494	88,855	96.1%	938	1,670	1,023
平成8年度	90,656	50,122	28,818	4,794	2,179	796	492	87,201	96.1%	882	1,487	1,086
平成9年度	89,324	49,751	28,527	4,528	2,137	657	453	86,053	96.3%	825	1,269	1,177
平成10年度	88,502	49,387	28,023	4,073	2,524	780	516	85,303	96.4%	781	1,231	1,187
平成11年度	85,976	47,977	26,968	3,847	2,787	966	511	83,056	96.6%	698	1,065	1,157
平成12年度	82,847	46,201	26,118	3,482	2,689	918	585	79,993	96.6%	643	1,025	1,186
平成13年度	79,556	44,321	24,680	3,444	2,803	848	507	76,603	96.3%	637	1,113	1,203

資料出典：「平成14年度公立学校統計調査報告書『公立学校卒業生(平成13年度)の進路状況調査編』」

参考：東京都教育委員会「都立高校改革推進計画・新たな実施計画 - 日本の未来を担う人間の育成に向けて -」(平成14年10月)

種類	特色	高校名	
進学指導重点校	進学実績の向上を目指し、進学指導のあり方の研究開発に熱意を有し、過去の進学実績および進学指導の組織的取り組みが評価できる都立高校の中から指定される。指定された高校には、東京都教育委員会より都立高校教員を対象とした公募で進学指導に意欲のある教員を配置されるなど、さまざまな支援が行われる。生徒の大学進学希望を実現できるよう、学校全体で取り組んでおり、7時間目授業や少人数授業、進路ガイダンスなどを実施している。	日比谷、戸山、西、八王子東、青山、立川、国立	
エンカレッジスクール	力を発揮し切れずにいる生徒が、社会生活を送る上で必要な基礎的・基本的学力を身に付けることを目的とし、基礎学習を中心に体験学習や選択授業を大幅に取り入れる学校で、全日制課程普通科の都立高校の中から指定される。高校生活への適応を積極的に図り、中途退学の防止に努めていくとともに、自らの進路を明確にできる生徒の割合について、平成15年度から学年進行により順次向上を図り、平成18年度までに3年生の9割以上が進路を明確にすることができるようになることを目指す。	足立東、秋留台	
重点支援校	学校経営計画に定める目標の達成のために組織的に取り組んだ実績等を的確に評価し、自立的改革を進めている学校、改善の取り組みに成果を上げている学校で、東京都教育委員会から重点的に支援を受けている学校。		
中高一貫6年制学校	6年間一貫の継続教育の中で自らの置かれている状況を見極め、今後進むべき目標を考え、目標実現のために主体的に行動する力となる「教養」を身に付けることができる教育を行い、子どもの総合的な学力を培うとともに、個の確立を図り、個性と創造性を伸ばす。また、使命感・倫理感、社会貢献の心、日本人としてのアイデンティティなど社会的な役割についての認識を深め、国際社会に生き、将来の日本を担う人間として求められる資質を育てる。このような、教養教育を重視した中高一貫教育を行う中で、社会のさまざまな場面、分野において人々の信頼を得てリーダーとなり得る人材を育成していく。各学校においては、教養教育を重視しながら、理数教育に重点を置く学校や国際理解教育に重点を置く学校等、それぞれ特色化を図っていく。	白鷗、文京地区・墨田地区・目黒地区(平成18年度) 立川地区・武蔵野地区(平成20年度) 中野地区・練馬地区・八王子地区・三鷹地区(平成22年度)	
総合学科高校	多様な科目を開設し、普通教育と専門教育を総合的に行う学校。自己の進路への自覚を深めることができる科目など幅広い選択科目を開設し、生徒の個性を活かした主体的な選択や実践的、体験的な学習を重視し、多様な能力・適性等に対応した柔軟な教育を行う学校。	晴海総合、つばさ総合、杉並総合、若葉総合、青梅地区(平成18年度) 葛飾地区・東久留米地区(平成19年度) 世田谷地区(平成20年度) 町田地区(平成22年度) 北地区(平成23年度)	
単位制高校	多様な科目の開設、柔軟で弾力的な履修形態、生徒の主体的な科目選択による学習の推進などの特色を持ち、一人ひとりの生徒の個性や能力を伸ばし、さまざまな進路希望や学習希望に応える学校。多様な選択科目を開設する単位制高校(多様な選択科目を開設し、弾力的で特色ある教育課程を編成することによって、生徒一人ひとりの個性や特性、進路希望等に応じた多様な学習を可能とする学校) 進学を重視する単位制高校(将来への夢の実現を望む生徒が、多様な選択科目の中から自己の将来の進路に必要な科目を選択し、主体的に学習に取り組むことができるよう、単位制の特質を活かし、生徒の進学希望の実現を図る) 単位制の工業高校(専門高校で学ぶ生徒の興味・関心等に応じた工業教育の充実を図るため、単位制の特質を活かした工業高校)と3種類ある。	飛鳥、芦花、上水、美原、大泉桜、翔陽、台東地区(平成18年度) 板橋地区(平成19年度) 墨田川、新宿、国分寺 六郷工科、総合芸術(平成22年度)	
科学技術高校	技術者として生涯にわたって専門性を高めていくために必要な意欲・態度や知識・技能を身に付け、技術革新に主体的に対応できる人材を育成するため、大学等へ進学し、継続して学習することを前提とした工業高校。	科学技術、小金井地区(平成22年度)	
東京版デュアルシステム	企業と高校の連携により、従来のインターンシップよりも長期の就業訓練を取り入れた、新しい実践的な教育を行う高校。実践の中で体験的に学ぶことに積極的な生徒や、勤労青少年で、技術・技能を高めながら学びたい生徒などの学習希望に応える。学校と企業とが協議の上作成した就業プログラムによる就業訓練を、週2～3日あるいは月・週単位といった長期にわたって実施することにより、卒業後の就業に役立つ実践的な技術・技能を身に付ける。	六郷工科	
産業高校	生産・流通・消費の基礎と相互の関連を学んだ上で、自己の進路希望に沿った専門教科を学び、幅広い視野と確かな職業観を備えた人間や商工業の知識をもとに、将来自ら起業を目指すこととする、志あふれる人間の育成を目指す。学校づくりの段階から、地元産業界と提携し、インターンシップ導入や社会人講師の活用などを進める。地域の産業の特性や地域のバランスを考慮し、区部と市部それぞれに設置。	墨田地区・八王子地区(平成19年度)	
進学型商業高校	ビジネスに関して必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、さらに、産業・流通構造の変化等、経済社会の変化に主体的に対応し、将来、国際社会で活躍できるスペシャリストとして育成するために、大学等に進学し、継続して学習することを前提とした商業高校。	千早、太田地区商業(平成21年度)	
ITを活用した教育推進校	インターネットなどの情報通信技術(IT)は、教育活動を支援する道具として有効であり、ITの活用により大きな教育的効果をもたらされると期待されていることから、基礎・基本の定着、メディアリテラシーの育成を図るとともに、学習指導の個別化の徹底、得意分野の伸長、主体的な学習活動などにITを徹底的に活用し、さらに学習指導方法や学び方の新たなスタイルを研究して「授業革新」を行う学校。普通科高校、単位制高校から指定。	北園、府中西、砂川	
体育・福祉高校	スポーツや健康、社会福祉についての体験的・実践的な学習の充実を図るとともに、地域との交流を積極的に推進し、心身ともに健康で広く社会に貢献できる人材の育成を目指す学校。	秋川(平成18年度)	
総合芸術高校	芸術の各分野において高度な専門性を持ちつつ、幅広い教養と豊かな人間性を備えた人材を育成し、都立の芸術高校として、わが国の芸術文化のさまざまな分野を支えていく人材育成を行うとともに、都立高校における芸術教育の拠点・発信基地となる学校。現在、音楽科・美術科を併置する芸術高校が設置されているが、芸術文化活動のさかんな首都東京の地域特性を踏まえ、生徒の芸術に関する多様な興味・関心に応えるため、芸術高校の改編により、演劇科およびメディア表現を中心とする学科を加えた総合芸術高校を設置予定。	総合芸術(平成22年度)	
特色化を進める工業高校	ものづくりやテクノロジーに興味・関心を持ち将来、国際社会で活躍できる人を育てることを目的とした学校。	秋川(平成18年度)	
チャレンジスクール	小・中学校時代に不登校経験を持つ生徒や高校の中途退学者等を主に受け入れる、単位制・総合学科の昼夜間定時制独立校。午前・午後・夜間開講の三部制で、3年間で卒業が可能な学校。少人数のきめ細かい指導を通して、基礎的・基本的な学力の定着を図るとともに、ボランティア活動等の体験学習を重視した教育が行われる。また、専任のスクールカウンセラーの配置等を通して、相談機能の充実が図られている。	桐ヶ丘、世田谷泉、大江戸、六本木、中野地区(平成19年度)	
定時制	総合学科タイプ(昼夜間定時制)	職業に関する多様な専門科目を設置し、ホームルーム指導等の学年制のよさを残した単位制の高校。生徒のさまざまな進路希望に対応して、資格取得や大学等への進学にも対応できるよう、多様で弾力的な教育課程の編成が行われる。	一橋
単位制高校(昼夜間定時制)	午前・午後・夜間の三部制で、生徒が自己の興味・関心、進路希望等に合わせて、自主的に科目を選択し、自分のペースで学習できるよう、教育内容・方法の充実と履修形態の多様化・弾力化を図る無学年制の学校。	新宿山吹、一橋、砂川、台東地区(平成18年度) 杉並地区・八王子地区(平成19年度)	
通信制	トライネットスクール	学習意欲のある者が「誰でも学べる」高校教育のセーフティネットの機能を果たす学校、インターネット等の情報通信技術の活用により「いつでもどこでも学べる」学校、そして、都立高校等とのネットワークの活用により「多様な内容を多様な方法で学べる」学校といふ3つの「ネット」を柱とする学校。	砂川

参考：東京都教育委員会「都立高校改革推進計画・新たな実施計画～日本の未来を担う人間の育成に向けて～」(平成14年10月)

編集部作成

## 参考文献・データ

### 【文献・資料】

東京都教育委員会「都立高校推進計画 新たな実施計画 日本の未来を担う人間の育成に向けて」(平成14年10月)  
『キャリアガイダンス』No.5(リクルート・2004)  
『新世紀キャリア形成 / 東京都立足立工業高等学校校長・小林洋司氏 / 都立高等学校の職業教育の現場から』(『法律文化』2004年8月号 / 東京リーガルマインド)

### 【ウェブサイト】

東京都教育委員会ホームページ「都立高校改革」  
[http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/p\\_gakko/kaikaku.html](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/p_gakko/kaikaku.html)  
文部科学省ホームページ「高等学校教育改革の推進」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/main8\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/main8_a2.htm)

## 社会状況の変化に対応していくための都立高校改革

藤本龍夫 氏

東京都教育庁学務部都立高校改革推進担当副参事



中央大学法学部卒業後、東京都入庁。東京都教育庁、同交通局、江戸川区役所、東京都水道局を経て2003年より現職。

### 特色ある学校づくり

「都立高校改革推進計画(以下、「推進計画」)」は、平成9年から平成18年までの10年間の計画期間としていますが、現在はどのような段階なのでしょう。

**藤本** 平成9年9月からの第一次実施計画、平成11年10月からの第二次実施計画では、「特色ある学校づくりの推進」、「開かれた学校づくりの推進」、「都立高校の規模と配置の適正化の推進」、「教育諸条件等の整備」の4点を基本的な方向と位置付けて、改革を推進してきました。そして現在、平成14年10月から平成18年度までの第三次実施計画では、これまでの成果を踏まえた集大成の計画として、都立高校を取り巻く環境の変化に対応した新たな展開を進めています。

「特色ある学校づくり」について具体的にお聞かせください。

**藤本** 一つの例として、これまでさまざまな課題を抱え、力を発揮できなかった生徒を受け入れるチャレンジスクールや

エンカレッジスクールについてお話しします。この学校では、基礎的・基本的学力を身に付けさせると同時に、中途退学を防止すべく、基礎学習を中心に体験学習や選択授業などさまざまな取り組みがなされております。このタイプの学校では、入学試験、学力検査はなく、チャレンジスクールでは中学校からの調査書の提出も求めないなど、他の道府県にはなかなか見受けられない仕組みとなっています。このように今回の特色ある学校づくりで設置された学校の中でも思い切った改革が行われていることから、これらは都立高校改革の象徴であると言えます。

その一方で、普通科高校の大半を占めるいわゆる中堅校では、特色を打ち出しにくいということがあるようですね。

**藤本** ご指摘の通り、普通科高校の中堅校では、個性化・特色化が必ずしも進んではいません。こうした学校でも、いろいろと努力しているのですが、まだ、生徒の意欲・能力を十分に発揮させる仕組みができていないところが多いと言えるで

しょう。今後は学校経営計画の策定を通じて、特色化・活性化に向けた自律的な改革を実施することが求められます。

既に何か具体的な施策はあるのでしょうか。

**藤本** 重点支援校制度を設けています。これは各高校から取り組み内容の提案を出していただき、審査の上、重点支援校として指定し、3年間にわたり東京都教育委員会が予算面等で支援していくシステムです。現在、41校が指定されています。

### 公立中高一貫教育校の二つの高まり

進学指導重点校の改革はどのような状況になっているのでしょうか。

**藤本** 現在、進学指導重点校については、日比谷高校を筆頭に7校指定しています。今年の春、指定後初めての卒業生が大学に入りました。今回の実績と過去の実績を比べてみると、いわゆる東大、京大、一橋大、東工大といった難関

国公立大学に40%も多く合格者を出していることが分かります。40%と言っても、往年の昭和30、40年代のように、東大入学者の上位に都立高校がずらりと名前を連ねていた時代とは違い、実数的にはまだそれほど多くはありませんが、進学指導重点校は確実に成果を出していると言ってもよいかと思えます。

時代の変化にも対応する改革ということですが、それは具体的にはどのようなことでしょうか。

**藤本** 例えば公立の中高一貫教育校に対する都民のニーズの高まりがあります。東京都教育委員会が実施した都民意識調査では、平成8年の段階では、公立中高一貫教育校について「必要」が49%、「必要ない」が31%でした。しかし平成13年の調査では、「必要」が60%、「必要ない」が12%と、都民の意識が大きく変化しています。このようなニーズに応じて10校程度の中高一貫教育校を設置します。

そうした新しいタイプの学校は最終的に何校設置するのでしょうか。また、一つの学校の適正規模をどの程度と考えていらっしゃるでしょうか。

**藤本** この「推進計画」は、来年平成18年度が完成年度となりますが、そこで最後の計画が立案され、最後の新設高校ができるのが平成23年度となっています。それまで全部で49校の新しいタイプの学校をつくる予定です。新設というのは、基本的に統廃合をしながらの動きになりますので、平成9年度と比較すると、平成23年度には29校減少して179校となります。これは少子化の流れに合致し

たもので、一つの学校の適正規模も、1クラス40人で1学年が6クラス、全校で720人を標準に考えています。

## 校長の裁量権拡大で自律的改革を

学校経営というソフト的な視点で見た場合の改革の現状を教えてください。

**藤本** 学校経営面での東京都教育委員会の支援策のひとつに、校長のリーダーシップをサポートする施策があります。ご存じのように、これまで学校というところは、何をやるにも職員会議での合議がなければ決まらないという体制がありました。しかし、目まぐるしく変化している時代に対応した学校教育をしていくためにも、校長の裁量権限を拡大したり、学校経営計画の立案や学校運営連絡協議会という地域の方を交えた会議や評価を浸透、徹底させたりすることで、時代に取り残されない学校運営を期待できるようになりました。また教員の人事権や予算についても、校長の意見が大きく取り上げられる仕組みを考えていますので、これまでのように何もかも東京都教育委員会で指定しなくても、校長のリーダーシップでどんどん自律的な改革を進めることができるようになってきています。また、昨年度から生徒による授業評価を全校で実施していますが、これも教員にとっての大きな活力源になっていると思います。

これだけさまざまなタイプの学校が登場しますと、中学生の進路指導が

重要になると思われますが。

**藤本** ご指摘の通り、そこが大事なポイントになると思っています。東京都教育委員会としては、中学校を対象に分かりやすい情報提供を心がけて、夏にはすべての公立中学校の担当者を集めた研修会を開催していますし、中学校向けのパンフレットも作成して配布しています。今は、生徒さんが「あの高校は家から近いから」という理由による高校選びをしなくなってきていると思います。「あの学校はこんな取り組みをしているから」、そのような高校選びをしているようです。さらに「あの校長がいるから」とか「あの先生がいるから」というような選択をするようになってくれば、もっと都立高校が活性化してくると思います。

計画期間も終盤、総括の時期に入ってくると思います。

**藤本** 計画終盤とはいっても、新しいタイプの高校から、今年初めて卒業生を送り出している段階です。高校の評価というのは、2回ほど卒業生を出してからなので、まだやっと1クールが終わったといところでは、東京都教育委員会としては、この秋から改革の成果を検証する組織を立ち上げ、卒業生を出し始めた学校について1校1校、学校運営等を評価し、新たな課題を見付け、それにどのように対処するかを進めていく予定です。

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

[h-bunka@lec-jp.com](mailto:h-bunka@lec-jp.com)

## エンカレッジ スクールの 取り組み

星野喜代美 氏

東京都立足立東高等学校校長



1976年3月日本体育大学体育学部卒業。同年4月東京都立目黒高等学校教諭。1979年4月東京都立九段高等学校教諭。1982年4月東京都墨田川高等学校校舎教諭。1996年4月東京都立飛鳥高等学校教諭。1999年4月東京都立富士高等学校教頭。2004年4月東京都立足立東高等学校校長(現職)。

### 中途退学者が激減

足立東高校はエンカレッジスクールに指定され、大胆な改革を進めています。そもそもエンカレッジスクールとはどのようなもので、どのような取り組みをされているのでしょうか。

**星野** エンカレッジスクールは、一言で言うと「生徒のやる気を応援する学校」です。高校生の中途退学者の増加が問題となっていた平成13年、東京都教育委員会は課題が多い学校の校長を集めて教育課題校検討委員会を設置しました。また、当時はフリーターという新語が社会に広がり始めた時期でもあり、この問題の解決も課題のひとつであったと聞いています。この委員会での検討結果をもとに、平成14年6月、都立高校改革推進計画「新たな実施計画」の中で、本校と秋留台高校の二校がエンカレッジスクールの指定を受けたのです。

エンカレッジスクールに指定される前には、どのような課題があったので

しょうか。

**星野** それはもう大変な状況があったと聞いています。伝説的な話のひとつに「学校の廊下をバイクが走った」という話があります。また、平成13年度は1年生の中途退学者数が3桁を数えました。中途退学率の高い学校ほど、退学者のほとんどは1年でやめてしまうケースが多いのです。この時期に着任した前任校長は生活指導の立て直しに着手し、改善の兆しが見え始めたころエンカレッジスクールに指定されたのです。思いも寄らない急展開に、1年に満たない準備期間であらゆる取り組みを実施しなければならない当時の教員は、本当に大変な思いをしたと聞いています。そして導入の翌年、平成16年に着任した私も教育課程等の整理から着手し、その年の後半から規範意識の育成を念頭に置いた生活指導に矢継ぎ早に取り組みむこととなります。これまでの間、教職員は朝早くから夜遅くまで本当に良くがんばってくれました。このおかげで目に見える成果が上がっ

たのです。

具体的にどのような成果ですか。

**星野** 大きくは2つあります。生徒の変容と教師の変容です。

まず、生徒の変容ですが、以前は私が生徒に何か注意をすると「辞めてやる、こんな学校」という反応がほとんどでしたが、落ち着いたところからの生徒の反応は「辞めたくない。この学校にいたい」というように変化しました。そのような変化は数字にも表れています。中途退学者数を見ると、平成13年度は3桁でしたが、翌14年度は51人、15年度は27人と激減しています。平成16年度は30人と若干増えましたが、以前の理由は生活指導上の問題でほとんどが退学していったのですが、最近は学校に来られなかったり、家庭の都合によるなど、内容が変化してきています。

一方、教員側の変容ですが、以前は生活指導の大変さから、ほとんどの教員が「早く異動したい」と言っており、校長として説得するのに大変でした。今は、「うちより大変な学校に異動するくらいなら本

校の方がいい」と言うようになり、最近では「授業が成立するようになり楽しくなった」というように変化してきました。「学校は良くなった」というのが共通した認識であり、このことから教職員の意識も前向きに変わってきていることが分かります。

## 体験学習が築いた 地域との連携

そこまで劇的に変化するには、大変な取り組みがあったことと思いますが。**星野** エンカレッジスクールでは多くの特色ある取り組みが行われています。まず挙げられるのが「30分授業」です。これは50分はもたないが、30分なら集中して勉強できるだろうということで導入されました。国語・数学・社会・英語の4教科で実施しています。生徒には好評で、アンケートでも一番高い支持を受けています。当初は2学年まで導入する予定でしたが、教職員定数等の問題で1学年でしか実施することができないのが残念です。次は習熟度別授業です。主要3教科である国語、数学、英語で実施しています。2クラス(約70名)を完全習熟度別に4クラス展開しています。課題は中間クラスの生徒数がやや多くなり、このクラスに若干の中だるみ傾向が見られることです。また、理科や家庭科などでは少人数授業を行っています。

さらに本校の最大の特色として「体験学習」があります。体験学習は・・・に分けられており、体験は1・2年次必修、3年次選択で各2単位設定しています。内容は、テニス・バスケット・相撲・太鼓・

演劇・フラワーデザイン・囲碁・茶道など25種類以上のメニューの中から興味のあるもの一つを選んで学習します。以前の学習指導要領で取り扱われていた全員参加クラブのようなものです。本校教諭以外に、市民講師として地域の方に来ていただいております。一流の指導者が揃っています。この体験の設定意義は、他者との協調を図り、趣味を広げ自身の幅を広げることがねらいでしたが、部活動の活性化に火を点け、何よりも地域との連携に多大な効果をもたらしました。例えば「太鼓」や「ダンス」は、地域のお祭りや各種イベントにとたくさんの声がかかります。その結果、生徒はやりがいを見出し、活動がますます楽しくなりますし、地域の人には喜んでいただける。そうした相乗効果もあって、地域に受け入れられる学校へと生まれ変わることができました。

体験は、1・2年次必修で各2単位を設定しています。ボランティア学習や就業体験、また資格取得につながる講座を準備しています。いずれも通常の座学にとどまるものではないことから、こちらも生徒たちはとても楽しんでます。同時に、この体験学習を通じて、生徒たちは自分の進路を考えるようになりました。これまでは就職の希望を聞くと、単純に事務系と答える生徒が多かったのですが、「保育士になりたい」とか「ヘルパーになりたい」と具体的な職業を挙げる生徒が出

てきました。

物事が変化するときには、さまざまな要素が総合的に関係して大きな力になるので、それが体験学習だけの影響だとは思いませんが、生徒は具体的な目標を持つことができるようになってきています。ですから進路の決定率も、一昨年度から51%、59%と上昇しており、今年はそのさらに上昇していくものと確信しています。

ほかに「二人担任制」の導入も本校の大きな特色です。二人の担任は全くオープンな立場で担任を務めます。教師にとっては大変な部分もありますが、生徒にとっては良いことだと考えます。生徒には心のナイーブな者も多く、2人の担任がいれば、1人の先生がだめでも、もう1人のところに助けを求めにいけるという利点があります。実際には、分掌という組織を考えると人数的に大変苦しく現状が精一杯の状態です。

## 生活指導は 「ほめることとしかること」で

この学校では入学試験で学力検査を行わないと聞いていますが。

**星野** 入学試験に学力検査はありません。



習熟度別授業の様子

ん。その代わりに企画力検査と小論文、面接を行います。本校は、中学校で成績が伸びなかった子を「もう一度一緒にがんばろう」と励ます学校ですから、成績は見ず、その子のやる気を見て判断します。文章が上手に書けない子、話がうまくない子もいますが、そのような子については、教員がなるべく意を汲み判定するようにしています。

以前は定員割れで全入となっていたこともありましたが、エンカレッジスクールになって入試倍率は上がりました。エンカレッジ生は、高倍率を乗り越え、選抜されて入ってきたわけです。それだけでも彼らにとっては「自分は選ばれて入ってきたんだ」という自信につながっています。

さらに本校では、いわゆる定期試験（中間考査、期末考査）がありません。これも特色のひとつで、生徒にとっては良いことなのですが、後々のことを考えるとこのままでよいのかとも思います。つまり、「試験」の感覚を生徒が忘れてしまい、就職試験などのときに困らないかという危惧感です。そこで本校では、試験の雰囲気だけでも経験させようということで、純粹に自分の学力を測るための「トライアルテスト」を実施しています。



委員会活動で生徒が作った紙芝居

ここまで大胆な取り組みをされてきて、そこから出てきた課題もあるのでは。

**星野** まず挙げられる課題は、現状では物理的に今以上のことはできないということです。しかし、これまでに構築したシステム、制度が生徒に喜んで受け入れられていることは間違いないので、あとは細部の修正が課題でしょう。

次の課題は生活指導です。以前は学校に遊び目的で来ていた生徒がたくさんいました。そのため学校は日々生活指導に追われました。エンカレッジスクールになって改善されたとはいえ、一部には遊び目的の生徒もおり、気を抜くと逆戻りの怖れもあります。そこで全員で「ほめることとしかること」を明確に指導しようと取り組んでいます。つまり授業中に訳もなく立ち歩く、携帯電話を使う、ジュースを飲むというようなことについては「ダメなことは絶対にダメ」と言う。このような細かい指導を徹底的に行いました。その代わりに、よいことは全員の前で褒める。このようなメリハリをつけた指導により、1カ月で生活態度は改善され、半年で生徒たちは褒められることの喜びを知るようになりました。

一連の取り組みの中ではっきりとしてきたことなのですが、エンカレッジスクールの使命は、生徒たちに基本的な社会生活の規範を身に付けて社会に送り出すことだと考えています。

## 教員全員で取り組む意識が重要

今後の展望として、まず教員に求

めるものは。

**星野** 本校の教員は本当によくがんばっています。教員に求められる姿勢として私が思うのは、これはどこの学校でも同じことですが、一つのものを変えようとするとき、教職員全員が一丸となって取り組む意識が必要だということです。本校がこれだけ短期間で変わることができたのは、みんなで取り組んでいるからで、誰のおかげでもないのです。さらに言えば、教員にはどのようなときでも子どもたちを引き付ける魅力と技術が必要だと思います。

足立東高校の今後、そして都立高校の今後についてご意見をお聞かせ下さい。

**星野** 本校は、このままいけばどんどんよくなると思います。これは、生徒が落ち着いて明るく楽しい学校生活を送れるようになるということです。ただし、そのための条件として、ある一定の募集倍率が必要です。定員割れすると本校に来たくない生徒も受け入れざるを得なくなってしまう。究極的には、どの学校も明確な入学意志を持った生徒を受け入れることが理想なのだと思います。高校全入時代の中、勉強する意欲のない者も何となく入学してきており、このことが荒れる学校をストップできない原因になっているように思われます。したがって私たちとしては、常に一定の人数が本校への入学を希望してくれるよう、本校のよいところをPRしていかなければならないと考えています。

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

[h-bunka@lec-jp.com](mailto:h-bunka@lec-jp.com)

# 重点支援校で 専門高校教育の 裾野を広げる

**本多吉則** 氏  
東京都立江東商業高等学校校長



1978年慶應義塾大学経済学部卒業。1981年慶應義塾大学大学院修士課程文学研究科哲学専攻修了。1982年科学技術学術書籍輸入商社勤務。1987年東京都立第四商業高等学校教諭。1998年東京都立深川商業高等学校教諭。2000年東京都立葛飾商業高等学校定時制課程教頭。2003年東京都立向島商業高等学校教頭・副校長。2005年東京都立江東商業高等学校校長(現職)。

## 3言語「IT・会計・英語」に 注力

江東商業高校は、今年度から3年間、重点支援校として新たな取り組みをされます。まず、重点支援校申請の経緯からお聞かせください。

**本多** 重点支援校を目指した背景には、本校に限らず商業高校全体の低迷があると思います。学校の数自体も減っていますし、入学希望の生徒数も減っている。商業高校を何とか活性化しなければいけないという思いは、教職員としては共通のものだと思います。ビジネス教育は必須ですし、それを中心となって担うのは商業高校です。

もう少し具体的に申しますと、商業高校は今、二極分化しています。進学や資格取得に力を入れて成功しているところと、そうではないところ。もちろん入

学してくる生徒の目的意識という問題もあるのですが、幸い本校の場合は、もともと都内でも有数の商業高校としてやってまいりましたので、そこからさらに上を目指し、商業高校の先頭を切りたいということでの重点支援校の申請をいたしました。

江東商業高校には、プールや体育館、情報ルームや校内LANなどが整備され、全館空調完備という素晴らしい環境が整っていますね。

**本多** 10年ほど前にそうした設備を整え、さらに優秀な教員もそろえました。しかし、やや「ぬるま湯体質」的なムードも出てきたため、重点支援校に応募するに至ったのだと思います。

重点支援校としての取り組み内容は、

**本多** 本校はもともと情報処理科と商業科という2つのコースがありましたが、3年

前からそれらを「総合ビジネス科」と1つにまとめました。つまり、情報処理だけに力を入れるとか、簿記だけに力を入れるのではなく、すべての生徒がビジネスに必要な「IT」、「会計」、「英語」の3言語に力を入れていくカリキュラムにしたわけ。そうした3言語を中心にした学習の中で情報処理、簿記、英検といった資格を取得できるようにし、就職率と進学率ともに100%にすることを目指します。現在も各希望者に関しては100%です。さらに実社会に必要なビジネスマナーやコミュニケーション能力を身に付ける。そして内外に開かれ、地域から信頼される学校になること。これが本校の重点支援校としての取り組み目標です。

東京都教育委員会では、商業高校のあるべき姿を先導的に示す役割を担う専門高校を、「リーディング・コマーシャル・ハイスクール(LCH)」として指定してい

ますが、本校はこうしたビジネスに特化した高校という意味で、前任の校長はリーディング・ビジネス・ハイスクールという言葉を使っていたようです。

生徒の志向性としては、地域に根差した就職を希望する割合が高いのでしょうか。

**本多** スタートが女子校であったということもあり、遠くの大学に進学するよりも、地元での就職を希望する生徒が多い傾向にあります。ただ近年は、大学、短期大学、専門学校への進学も増えていきます。

## キャリア教育も1年から充実

ビジネスに強いという特色を打ち出すために、地域や企業などと連携した取り組みが行われていますね。

**本多** 例えば、「ビジネスマン・シンポジウ

ム」といって、第一線のビジネスマンとして活躍されている方、日常業務として海外と深く結び付いている方などを講師として招き、講演をしていただくということを毎年実施しています。また、経済同友会の方に講演をしていただいています。このような取り組みは、他の学校ではほとんど行われていないと思います。

さらに独立行政法人雇用・能力開発機構で行っている「中高生仕事ふれあい支援事業」の指定を受け、職場体験などの活動もおこなっています。

インターンシップの実施状況についてはいかがですか。

**本多** 本校では就職希望者が約半数で、残り半数は大学か専門学校への進学希望者です。したがって、学校を挙げて、全員をインターンシップへというわけにはいかず、1,2年生の希望者で行っています。例えば、東京都の産業労働局で

行っている「商人インターンシップ」という販売系のプログラムには、何人かの生徒を参加させていますが、事務系への就職希望が多い本校の生徒にはやや合わないところがあります。そのようなこともあり、事務系へのインターンシップは長期休業中に実施しています。企業にインターンシップの受け入れをお願いしている生徒は年間20数名という現状です。

ビジネスマナーを身に付けさせるに当たって、気を付けていることはありますか。

**本多** 「挨拶をし、時間を守り、身だしなみを整える」ということをいつも言っているのですが、身だしなみを整えるといっても、どこに基準があるかによって、整え方が違います。厳しくしようとすればいくらでも厳しくできるのですが、私はすべてを必要以上に厳しくして子どもらしさをなくすよりは、多少は子どもらしさがあって、元気に笑顔で学校に来る方がよいということを言っています。とはいえ、平均的な都立高校よりは、やはりビジネス系ですから、きちんとしています。生徒昇降口の扉を朝8時半には閉めるのですが、遅刻する生徒はほとんどおらず、退学者もほとんどいない、そのような学校です。

中高連携で授業を行うような試みもされているようですが。

**本多** 積極的に行っています。本校のLL教室やパソコンなどの施設で中学生に授業を行ったり、中学校から頼まれて、こちらから出かけて行って授業を行ったりすることもあります。東京都の教育庁報にも掲載されましたが、授業を受けた中



充実した設備のパソコン実習室

学生からも「専門高校の設備の素晴らしさに驚いた」とか「高校で何を学ぶのか考える機会になった」といった反響もあるようです。

高大連携についてはいかがでしょうか。

**本多** 高大連携は、本校独自で行っているものはまだありません。現在あるのは、東京都の第六地区（墨田区、江東区、江戸川区、葛飾区）の高校と一緒にやっているもので、年に十数回あります。大学の先生を招き、地区の生徒を集めるのですが、なかなか商業高校が参加するような講義がないこともあり、本校とはそれほど接点がありません。今後は、商業高校が独自でこうしたことをやっていたらいいと思います。

進路指導、キャリア教育にも力を入れていらっしゃるようですが、どのような内容なのでしょうか。

**本多** 1年生のときから3年間を見通して積極的に行っています。おおよその決まったかたちとして、1年時はインターシップ、企業の見学、適性検査を行い、2年時は外部の方の講演会に参加させたり、外部との交流を持ったりするようにします。3年生になると外部の講師を頼んで、小論文の指導を徹底して行っています。

## 学校評価を向上させる 努力を

これからの課題としてどのようなことがありますか。

**本多** 1つは入学希望者の倍率があま

り上がらないことです。これは商業高校全般に言える傾向なのかも知れませんが、去年は推薦入試では3倍くらいでしたが、一般入試では1.1倍でした。本校では定員割れはありませんが、常に少し定員を上回る程度です。近隣に住むまじめな生徒の入学が多いという特徴があります。生徒指導も割と厳しくしていますし、入学すると検定や資格試験の勉強がありますから、それを理解した上で入ってくる生徒なのです。

具体的な倍率目標はありますか。

**本多** 1.3倍です。このくらいがちょうど選抜しやすいレベルだと思います。推薦入試で落ちた人が全員受験してくれると、それだけで1.1倍にはなるのですが、最近の子どもは、推薦でだめだと、他の高校を受験してしまう傾向があります。とはいえ、1.3倍という目標の達成はそれほど難しいものではなく、広報活動によって十分達成できるものと思います。

学校説明会はどのように行われているのでしょうか。

**本多** 本校は、毎年15～16校の中学校から声がかかります。そこでは、専門高校の話をしたり、ビジネス高校としての特徴について説明したりしています。そのほかに体験入学も2回実施しています。また、学校訪問は随時受け付けています。本校には中学生や保護者によく来ていただいています。

保護者、教員、生徒にそれぞれ行う学校評価アンケートがありますが、その結果についてはどのように受け止められていますか。

**本多** 全体的には地域の評価は悪くは

ない学校だと思うのですが、生活指導面でやや下降傾向にあるという危惧を持たれているようで、今後より一層この面での力を入れていかなければならないと考えています。また、授業については、教員の研修を内部的に充実させ、アンケート結果等はきちんとフィードバックできるようにしています。

教員間の意思の疎通を高めるといことが、学校運営協議会の報告で挙げられていますが、その点についてはどのようなことをされているのでしょうか。

**本多** 学校で一番遅れていることは、実は職員間の意思の伝達なのです。何かあると職員会議を開いたり、掲示板に書いたりしなければと分からないという、一般の企業では考えられないような前近代的な状況が、学校では当たり前になっています。せっかく校内にLANも張り巡らされているわけですから、データベースをきちんと構築し、例えば私が何かを発信したらどこの端末でもパッと見ることができて情報を共有できる、そのような組織にしたいと考えています。物理的に可能なので、あとは教員がいつも端末から情報にアクセスするという習慣が身に付くようにしていきたいと思っています。

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

[h-bunka@lec-jp.com](mailto:h-bunka@lec-jp.com)